

カンボディア・西トップ寺院の調査

—第10次—

1 はじめに

奈良文化財研究所はこれまで継続的にカンボディア・アンコール遺跡群のなかの西トップ寺院（Western Prasat Top）において、現地機関APSARAと共同で調査研究を続けてきた。西トップ寺院は高さ8mほどの中央祠堂を中心とし、南北に小塔を配し、東側には仏教テラスと呼ばれる低い基壇を延ばす。また周囲にはラテライト石列が巡り、8つのシーマ石（結界石）が置かれる。それ以外にも、寺域の北東部および南東部、さらに仏教テラスの北側・南側に、小規模な基壇状の構築物が確認されている。さらに寺域外には、1920年代にフランス極東学院がこの遺跡を調査した際に片付けられた転落石材が並べられている。

今後の本遺跡の遺跡整備においては、主要建造物以外の周囲の遺構についても調査をおこない、その性格を明らかにする必要がある。本年度はそうした観点から、寺域の南東部にある小基壇と、寺域外に並ぶ転落石材を中心に調査を実施した。（杉山 洋・石村 智）

2 第10次調査

寺域の北東部と南東部には、一対の平面方形のラテライト製の小基壇が存在し、また仏教テラスの南北にも一対の平面円形の砂岩製の小基壇が存在する。これらは寺院にともなう小型ストウパの基壇と推定されるが、今

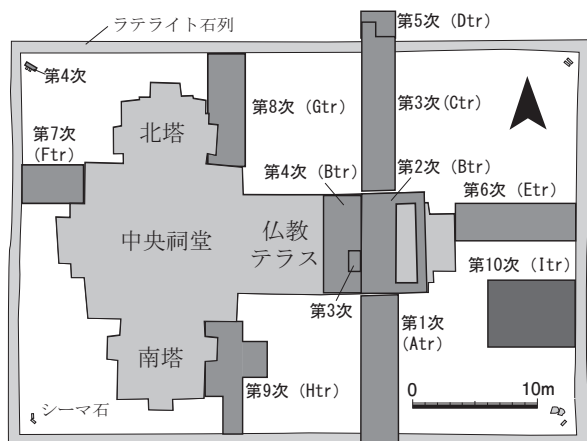


図8 西トップ寺院のトレンチ配置図 1: 600

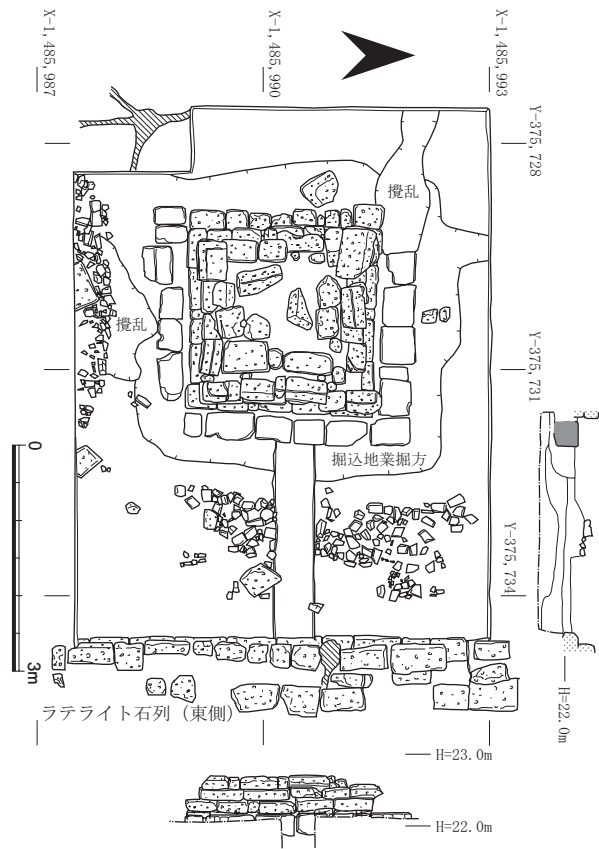


図9 第10次調査遺構平面図・サブトレンチ断面図・基壇東側立面図 1: 100

回はその性格を明らかにすべく、南東部のものについて発掘調査をおこなった。調査期間は2009年7月22日～25日、トレンチの大きさは東西7m、南北5.5mである（Iトレンチ）。

厚さ10～20cmの表土を除去すると、ラテライト基壇の外側を巡るような砂岩の石列が、西側を除いてみとめられた。その石材のなかには化粧削形が施されたものもあり、転用石材と考えられる。またそれらを囲う、基壇の掘込地業の掘形ラインが検出された。さらに掘形の外側の東側・南側では、レンガが带状に散乱しているのが確認された。

調査区中央東側にサブトレンチを設定し下部構造を調べたところ、掘込地業は現地地表下50cmほどで底部に達し、また砂岩石列も垂直方向に1段しかないことがわかった。

掘込地業の埋土からはタイのスワンカロック産の石灰壺（15世紀前半頃と推定）が出土したことから、この基壇の構築は寺院が上座部仏教に転換し、仏教テラスが造営さ



図10 EFEOによる古写真（中央祠堂北面）（Photo Courtesy EFEO）

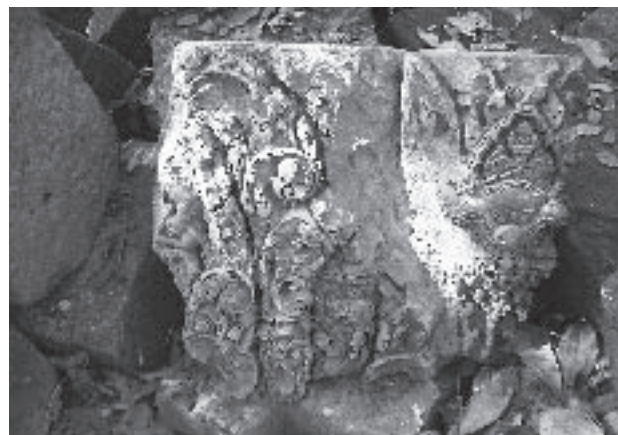


図11 散乱石材中から発見された北面リンテル

れた時期（13世紀頃）以降であると推定される。

なおスワンカロック産の陶器はラームカムヘーン大王（スコタイ王朝第3代の王で、タイに上座部仏教を導入した）の時代から生産されるようになったと考えられ、14～15世紀頃には盛んに国外へ輸出された。日本にも中国人の商人によって持ち込まれ、「宋胡録」の名で親しまれている。

この小基壇が寺院の上座部仏教への改修期以降に帰属する可能性が示されたことから、この遺構は小型ストゥーパの基壇である可能性が高いと考えられる。上部構造である伏鉢本体は失われているが、あるいは周囲に散乱するレンガがその材料であったのかもしれない。また遺跡周囲に散乱する石材のなかには、ラテライト製の宝珠形石材があることから、これが頂部に飾られていたのかもしれない。いずれにせよ出土遺物の年代や、砂岩石材に転用が認められることから、この遺構は寺院の変遷の中でも末期の段階に位置づけられると判断される。

（林 正憲・石村 智）

3 装飾石材の調査

西トップ寺院の寺域の外側には、装飾の施された石材が整然と並べられ、さらに外側には多くの石材が散乱している。調査では、装飾石材のインベントリー作成と、北側、南側の散乱石材の平面図作成をおこなった。散乱石材は、北側、南側、西側の順に多く認められた。

南側散乱石材の調査中に、散乱石材の中から紅色砂岩製のリンテル片を1点検出した。リンテル中央に表され

る尊像部分には、アイラーヴァタ（象）に乗るインドラ神が表された図像の一部を確認することができた。今回発見されたリンテルは、フランス極東学院（EFEO）が1920年代に撮影した古写真に写っているものと同一であることを確認した。このことから、今回発見したリンテルは中央祠堂の北面開口部に埋められていたものと判明した。今回発見した北面リンテルと中央祠堂南面に現存するリンテルは、その図像の特徴から、バンテアイ・スレイ様式（10世紀後半）～クレアン様式（10世紀末～11世紀初頭）に属するものと考えられる。

また、整然と並べられた装飾石材の多くには、仏教的図像が装飾されたペディメントなどを確認することができる。これらの装飾石材と祠堂上で原位置を留めているペディメント、EFEO古写真の図像をインベントリーとして整理したところ、西トップ寺院に認められる図像は大まかに3時期に分かれるようである。第1期：バンテアイ・スレイ様式～クレアン様式（リンテルなど開口部）、第2期：バイヨン様式末期～ポスト・バイヨン様式前半（仏陀坐像を有するペディメントなど）、第3期：ポスト・バイヨン様式後半以降（北塔偽扉）、の3時期である。今後、プレア・ピトゥなど西トップ寺院と同時期にあたる遺跡の調査をおこない、図像の比較調査を進める予定である。

（佐藤由似／奈良文化財研究所カンボジアプロジェクト）